

プロフィール？

男ばかりの三兄弟の末っ子として生まれました。

若い頃にヤンチャしていた父。おおらかな母。「弟は俺たちのおもちゃ」と言って憚らない兄達に囲まれて育ちました。決して裕福とは言えない、というよりは今でいう「相対的貧困家庭」でしたが、その割に明るい家族でした。

自分が中学 1 年生の時、体育の授業で「飛び込み前転」という技に失敗し、首を痛めました。右半身に軽い麻痺が出て大変だったのですが、その時に受けたリハビリの先生との出会いが衝撃的でした。「リハビリ室」と書かれた部屋に入ると、牽引（首を引っ張るモノ）と電気を流す機械の説明をした後、「明日から自分でやってね」と言って、受付の机で漫画を読んでいるのです。世の中にこんなに楽な仕事があるのかとビックリし、将来は絶対にこの仕事に付こうと思いました。なぜなら漫画が大好きだったからです。

高校を卒業して念願だったリハビリの専門学校に入学しました。「理学療法士」という職種だというのは入学する直前に知ったくらいでした。入学してみると、同級生は既に病院で勤務していて、「これからは理学療法士の資格を持っていないと病院で働けないから」と、勤務先の病院から送り出されてきた人が何人もいる状況でした。当然、本気度も基礎知識も段違いで、漫画を読んでいる時間が無くなりました。

「このまま続けるかどうか」と悩んでいる時、病院実習がありました。3 日間の見学実習で、「突っ立って見学していれば終わるだろう」と思っていた自分の前に現れたのが Y 先生でした。僕自身に足りないものに気付いていたのでしょう。生まれつき大脳皮質がない赤ちゃんとその子のお母さん、ALS という病気の末期患者さん、といった難しい患者さん達の元に僕を連れて行き「出来ることを何でもいいからやってみろ」と言い残し、そのまま放置するという荒業を繰り出されました。

何も出来ないでいる僕に ALS の患者さんが、当時の最先端だった目で文字をタイプする「コミュニケーションエイド」を使って文章を打ち始めてくれたのは夕暮れの二人きりの病室での出来事でした。五十音表に沿って移動するカーソルを瞬きで操作するので 1 文字打つのにかなりの時間がかかりました。どれくらいの時間が経ったか覚えていませんが、画面には「ぼくの からだでよければ いくらでも ためして りっぱな せんせいになっ てね」の文字が。自分自身の情けなさ、全身が動かない患者さんの人としての素晴らしさ、そして何よりも担当していた Y 先生と患者さんの信頼関係に心が震える思いでした。その日から真剣にこの仕事でやっていこう、と思ったのを今でも鮮明に覚えています。

卒業後、一旦は山奥の病院に引っ込んだのですが、仕事を始めて3年目にY先生の紹介で現在の病院に転職しました。高校からストレートに病院勤務までしたことで社会経験のなさを痛感したので夜間の学部がある青山学院大学に通い始めました。そこで心理学を学び、少しでも患者さんとの関係を上手く築きたい、というのが動機だったと思います。

その後、Y先生に呼ばれ母校であった専門学校の教員を8年間やりました。熱意はあったのですが、学生には不人気の先生だった記憶しかありません。今考えると熱意が空回りしてプッペだらけの先生だったのだと思います。

再び現在の病院に戻ったあと、子どもに恵まれました。2006年に長男が、その3年後に双子の女の子を授かりました。

子供たちが小さい頃は仕事の方が面白かったのも、それほど育児に積極的ではありませんでした。

転機は長男が小学校2年生の時でした。それまで何をやってもスイッチの入らない息子がたった一度の体験会参加を機に「野球をやる」と言い出したのです。お茶当番が大変と聞いていた妻と数週間もめた後、「ママはパパと離婚して。僕はパパについていく。反対してるのはママだけだから、離婚したら僕、野球出来るよね。」と言われた妻が根負けし、野球を始める事になったのです。

入ってみた野球チームでは息子と周りのレベル差が凄すぎて、見ている親としては辛い状況でしたが、本人はいたって楽しそうでした。そんな息子が小学校3年になって「パパ、僕と一緒に練習して」と言ってきたのです。毎朝6時に子供を起こして食事をさせ、その後学校に行く前の1時間を使って近くの公園で野球の練習を一緒にやりました。当時の野球チームはどこもプッペな言葉が飛び交っていたので、せめて二人だけの練習の時には楽しい野球をやろうと決め、そのうち近所の子も参加するようになった朝練は野球チームを卒業するまで3年近く続けました。

長男は「不器用の塊」のような下手さ加減でしたが、素晴らしい才能を持った他の子供たちのおかげで4年生最後の区大会で優勝しました。元々強豪と呼ばれるようなチームでもなかったのですが、大人たちの方が色めきたったのですが、5年生になった彼らのチームはソコソコまで行くものの勝てない日が続いていました。ついには、1年前に優勝した区の5年生大会で初戦負けを喫するという低迷ぶりでした。しかし、初戦敗退のその直後、キャプテンを務めていた子が「来年の春大会で優勝して県大会に出よう」と言ったのです。創部以来県大

会出場はおろか 6 年生チームでは地区大会の優勝を一度も経験したことの無いチームなのに。「何言ってるんだ、こいつ」と心の中では思いましたが、彼らは冬の間自主的にトレーニングに励み、春大会でチーム創立以来初となる 6 年生チームでの区大会優勝を勝ち取り、県大会の出場権を獲得しました。そして、あろうことか、夏に行われた県大会では県内 800 チームの頂点に立ったのです。

一回戦負けの直後から「春には勝って県大会へ」と言い続け実現した子ども達。そして、県大会の出場権を得ると今度は「参加するだけじゃダメだ。県大会で優勝しよう。」と言い、実際に奇跡としか思えない結果を残した子ども達。言葉の持つ力を思い知らされた出来事でした。この頃から言葉の持つ力を考えるようになっていったのだと思います。

その長男が小学校を卒業する間に、ひよんなことからペップトークの講習を受ける事になりました。県大会に向かう息子に大した言葉をかけられなかった残念な自分を変えたかったのです。初めて受けた講習では恥ずかしさから自己開示できない自分がいましたが、それでもすべてを受け入れてくれる講師との出会いは貴重な体験でした。その講師から「岩崎代表の講演会があるから来てみませんか」とお誘い頂いて、初めて聞いた講演会で衝撃を受けました。「こんなにスゴイ世界があるのか」と思い、そこからはペップトークの世界にハマっていきました。

プッペな言葉を家族に浴びせていた父親が少しずつ変わっていく姿を妻も子供たちも応援してくれました。そして娘たちに「パパは変わったよね」と言われるのが嬉しくて今でもペップトークを学んでいます。

長男が中学を卒業し、彼の野球がひと段落したので今度は娘たちの応援をしたいと思いブログを始めました。ペップトーク普及協会では夢に向かって頑張る誰かを本気で応援する人を「ドリームサポーター」と呼びます。娘たちにとってのドリームサポーターでありたいと思うと同時に世の中で頑張って子育てをしているお父さん、お母さんのドリームサポーターでもありたいと思い双子との日々をブログに記すことにしました。

双子というのは周囲から比較され続ける難しさがあるようで、双子であるがゆえにそれぞれの個としての存在の重要性を教えてください。また、思春期特有の子どもから大人に変わっていく際に起こる様々な難しさも抱えています。その一つ一つの出来事ときちんと向き合い、言葉を選びながら応援する事で結果的に娘たちの自己肯定感が高まり彼女達らしい人生が送れることを願っています。

ブログの内容と合わないと感じられる部分もあると思いますが、今はそんなことを考えながら毎日子ども達と楽しく過ごしています。